

国際土質基礎工学会

第2回アジア地域会議を終って

渡 辺 隆\*

1. 会議開催までの経過

標題の会議は英語では The Second Asian Regional Conference of the International Society of Soil Mechanics and Foundation Engineering という長い名前がついている。英語名からも想像できるように国際土質基礎工学会は、現在アフリカ、アジア、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリアの六地域に分けそれぞれの地域に副会長をおき、4年目ごとの国際会議の中間に、それぞれの地域会議を開くことが決められている(1953年スイスのチューリッヒでの第3回世界会議で決定)。

初代のアジア地域の副会長はわが国の星 埜 和氏であり、チューリッヒ会議に参加後、第1回アジア地域会議をわが国で開くよう努力されたが、諸種の事情で実現されなかった。1957年第4回の世界会議(ロンドン)でインドの K.L. Rao 氏がアジア地域副会長に当選し、第1回アジア地域会議は1960年2月ニューデリーで開かれ、わが国から星 埜 和・赤井浩一の両氏が参加した。その後第5回世界会議(1961年、パリ)でわが国代表の最上武雄氏が、アジア副会長に重任したインドの Rao 氏と会談して、第2回の地域会議を1963年に東京で開催することが決定されたのである。

2. 会議の開催準備

第5回のパリ会議で正式に決定される以前から、東京での会議の開催の機運があったので、土質工学会の国際部を中心に若干の予備的作業を進めていた。しかし正式決定の報告があってから、本年春の開催までには1年半程度しかなく、国際的会議の準備としては必ずしも十分とはいえなかった。

この種の準備はスタートから順調に行くことは現在の状況からは困難なので、少々まごついていた時期もあったが、1961年10月に国際土質基礎工学会の事務局長あてに正式の通告を行なって、正式開催へのスタートが切られたわけである。同年12月に準備のための打ち合わせが行なわれ、1962年1月にアジア会議準備委員16名が土質学会長より委嘱された。この準備委員会により会議期日、会議候補地、参加者の範囲などが決定され、また全世界の国際土質基礎工学会加盟への開催通知を発送した。また予算規模や資金調達の方法、組織委員会、実行委員会の構成、運営方法などが検討された。これまで

は土質工学会内の組織による準備であるが、実際の準備には、全権を委ねられた組織委員会の組織を確立し、能率的な運営をはからねばならないので、1962年4月に組織委員50名が土質学会長 久良知丑二郎氏を委員長として組織委員会を構成した。この組織委員会は会議開催までに3回開かれ、会議に関する大綱を議決したのである。なお組織委員中より25名以内の実行委員を選出して実行委員会を作り、会議に関する実務をすべて処理する組織が作られた。実行委員会は委員長 星 埜 和氏、幹事長 大崎順彦氏をはじめ、総務、論文、財務、設営、関西の各部委員数名から構成され、各部に主査と幹事が定められていた。実行委員会は1962年6月から会議当日まで10ヵ月半に17回開催された。会議開催までの準備作業計画はつきのとおりであった。

1962. 6	会議計画国内発表 会議公報 (Bulletin) No. 1 発送 後援依頼	1963. 1	会議公報 (Bulletin) No. 2 発送
9	提出論文概要受理 参加希望者予備申込み受付	2	海外参加者申込み締切り
10	募金開始	3	国内参加者申込み締切り
11	論文提出締切り	4	会議公報 (Bulletin) No. 3 発送 募金締切り
			プロシーディングス第1 巻発行

これらの準備作業もすべて予定通り進行したわけではなく、かなりの変更を要したのもあった。1962年の7月に会議開催趣意書を各方面に送付し、会議の準備も一段と活気を加えてきた。実行委員会の発足と同時に日本学術会議、文部省に対して後援を依頼し、また土木学会、日本建築学会、農業土木学会の後援をえて学術的な国際会議への国内の機運は次第にでき上っていった。

会議の公報 No. 1 は会議の目的、期日、参加資格、論文執筆要領等について説明し、予備参加用紙が添えられたもので、世界の国際土質基礎工学会の各加盟国、アジア地域の主要大学、研究機関、その他の人々に送られた。アジア地域の正式加盟国は日本のほかは中共、インド、イスラエルの3ヵ国であるので、未加盟国にもなるべく多くの参加者を迎えるために苦心した。この反響として海外より40名程度の予備申込者があったが、会議の切迫につれ、取消し、突然の申込み等で準備は非常に混乱させられた。また論文は申込み期限が1962年9月末日、論文原稿の提出が同11月15日までであったが、論文が現実にはそろったのは1963年3月で、プロシーディングスの第1巻作製のため非常な努力を必要とした。その後1962年11月に会議公報 No. 2 を送付し、本会議場を国際文化会館ときめ、会議の次第、論文発表と討議の進め方、見学旅行日程、国内での滞在、旅行に関する情報を示した。また正式参加申込み、見学旅行申込み、ホテルの予約申込み、追加プロシーディングス申込みの用紙を添付した。しかし参加者の予定がそれほど簡

\* 正員 工博 東京大学助教授工学部 土木工学科

単に決めぬためか、期限の12月末日も守られず、また変更等が多くて準備ではかなり難渋させられたのである。

### 3. 会 議

会議はつぎのような日程で無事行なわれた。

アジア会議プログラム

月 日	時 間	項 目	参 加 費
5月1日(水)	9.00~12.00 14.00~14.30 14.30~16.30 16.30~19.00	登 録 開 会 式 特 別 講 演 公式レセプション	7 200 円 (夫人 1 080円)
5月2日(木)	9.00~12.30 13.30~19.00	第1部会研究発表 都内見学	
5月3日(金)	9.00~12.30 13.00~18.00 13.30~17.00 17.00~18.00	第2部会研究発表 レディス都内観光 第3部会研究発表 映 画 会	
5月4日(土)	9.00~10.30 10.30~12.30 12.30~13.00 14.00~17.00	第1部会研究発表 第2部会研究発表 開 会 式 椿山荘パーティ	
5月5日(日)		休 日	
5月6日(月) ~8日(水)		見 学 旅 行	36 000 円
5月9日(木)	9.00~17.00 18.00~19.00 19.00~21.00	見 学 旅 行 京都会場特別講演 レセプション	
5月10日(金)	9.00~15.00 15.00	京都市内観光 解 散	

会議参加者は外国人 18 カ国から 40 名(うち婦人 6 名)、日本人 172 名(うち婦人 6 名)であった。また論文提出数も予想より多くむしろ小規模の世界会議の感があったが、アジア地域からの参加者が意外に少なく外貨事情の悪さが反影したものであろう。国際会議であるため、経費もかなり多額の約 1000 万円を要した。学会予算では余裕がないため、その大部分は関連業界各位の理解ある協力によったのである。幸いに各方面からの温い援助を頂き、諸準備を心おきなく推進でき、また会議の運営もきわめて円滑にできた。

### 4. 講演会、代表者会議

講演会はつぎの4つの分科会にわけて行なった。

分科会	題 目	提出論文数	発 表 月 日
I	土の性質とその測定	31	5月2日 午前・午後
II	建造物の基礎	20	5月3日 午前
III	土構造物の建設	18	5月3日 午後
IV	地盤改良	10	5月4日 午前

講演は原則として論文提出者で会議に出席したものは口頭発表を行ない、その他の論文は Session Reporter がまとめて報告を行なった。講演はすべて英語で行なわれたために、討論その他で多少問題があり、会話能力の向上の必要性が感ぜられた。またできれば英語、日本語の同時通訳を行なえば、さらにスムーズな進行ができた

のではないかと思われた。討論についても議事録に収めるために記録をテープレコーダーで取っていたが、あとの処理が非常に大変で、できれば速記者を使うべきであろう。代表者会議については今回の会議の決議をいかにするかについて、正式参加国であるインド、イスラエル、日本とが主として議論を行なった。地域会議のやり方について定まった方式もないし、またそれぞれの国の正式な代表としての打合せを行なって出席したのもではないので、議決のやり方にもいろいろ問題があったようである。しかし一応前回のインドでの第1回地域会議の決議を参考にして、国際的な研究、教育上の協力、アジア地域の未加盟国の正式加盟への努力、研究上の情報交換の必要性などを決議された。

以上のほか特別講演としては“地震の経験と予知問題”について那須信治氏が、“低開発国における土質工学”について J.G. Zeitlen 氏が講演した。また京都では“日本における建築美”について村田氏が講演した。

### 5. 見学会、パーティ

見学会、パーティはつぎの日程で行なわれた。

- 婦 人 都 内 見 学 会……草月会館、明治記念館、銀座三越、銀座一丁目などを見学し、新橋天春にて食事 (5/2)
- 都 内 見 学 会……東芝科学館、高速道路1号線海老取川トンネル工事 (5/3)
- 東京→京都見学旅行……東海道新幹線電車見学および試乗、スカイ・ライン(声の湖展望) 早雲山地すべり (5/6)
- 東海道新幹線富士川鉄橋工事、由比地すべり工事と海岸道路工事 (5/7)
- 東郷ダム、瀬戸市(瀬戸物工場見学)、名古屋城、稲永セル防潮堤工事、錦田干拓工事、長良川建設省降雨実験所、東海道新幹線羽島駅付近工事 (5/8)
- 八幡製鉄堺事業所、鶴甲山、名神高速道路茨木→京都南インター・チェンジ間試走講演会、レセプション(京都国際ホテルにて)京都市内観光見学 (5/10)

### 6. あとがき

今回のアジア会議で正式加盟国の1つである中共の参加がなかったが、これは台湾からも出席するかも知れないので行けないとの政治的理由によるものであった。われわれは政治的な配慮はいっさいなしに純粋に学問的立場から準備したのであるが、このような問題が生じたことはまことに残念であった。またソ連からの参加者が会議期日ぎりぎりに突然申し込んできたため、入国手続等で大変難行した。さらに正式に申し込んだ人の中にも何の連絡もなしに欠席し、われわれとしてはホテルの予約等かなり頭を悩ましたのである。このようにいろいろ問題は含んでいたが、出席者に大体満足してもらえて、好評のうちに無事終了できたことはわれわれ世話をしたものの1人として心から喜んでいる次第である。今後わが国での国際会議の機会も増えることと思うが、この報告が何かの参考になれば望外の喜びである。なお本報告は“土と基礎”の Vol. 11, No. 9 によるところが大きく、細部はこれを参照されたい。(1963.10.2・受付)